

留学・研究計画書

氏名 小林 理修	留学機関名 アリーガル・ムスリム大学 歴史学科高等研究所
留学先国名 インド	留学期間 西暦 2007年4月～2009年3月
研究テーマ 中世南アジアにおけるイスラームの展開と在地社会—グジャラートを中心に	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>生まれも、言葉も、生活習慣も、思想・宗教も異なる人々が出会う場において、どのように社会が形成され、展開していくのか。異文化接触の研究は人文学の主要な課題の一つである。申請者は、特に、歴史的に大きな役割を果たしてきたイスラームとその信徒の活動に注目している。</p> <p>イスラームは7世紀のアラビア半島に興ったが、現在は世界三大宗教の一つとして、全世界に広まっている。その展開の過程においては数々の反応が見られ、イスラーム自体も地域と時代とに応じて様々に変化していった。所謂原理主義者の宣揚するイスラームはその一形態であって、現実のイスラームは多様である。申請者は、イスラーム世界の拡大過程において、ムスリムが、現地社会にどのようにして定着し、他集団といかなる関係を構築していったのか、という問題に関心を持っている。その道行きの解明を通して、イスラームという宗教の性格や、それを信仰する諸民族・集団の個性を浮かび上がらせていきたい。</p> <p>ムスリムはアジアを中心として各大陸に居住しているが、最も大きな人口を抱えている地域は南アジアだ(4億人以上)。現在、インドには全人口の一割強、一億人以上のムスリムが生活し、社会の不可分の成員となっている。とはいえ、南アジアの近現代史は、一面においては宗派主義対立に彩られてきた。中でもインドにおけるムスリムとキリスト教徒とに対する排撃運動は際立ち、彼らを本質的に外来の侵入者と信じる一党の台頭は無視し得ない。このような状況の中で、第三者の立場から、イスラームの展開過程を実証的に検証することは重要な意味を持つ。また、その作業は、有史以来、外来の諸要素を取り込んできた南アジア社会の特徴を窺う基礎ともなる。</p> <p>申請者の研究は、主に、ペルシア語・アラビア語史料を用い、特にデリー・スルターン朝の衰勢に伴って14-15世紀に簇生したムスリム地方王朝の展開とその下での社会の変容に焦点を当てる。この時期は、インド社会の統合に成功したとされるムガル朝の成立基盤を準備した時期であるのにも関わらず、研究の対象として注目されることは少なかった。それに加え、現地研究者の間でも、母語ではないアラビア語・ペルシア語の史料を用いた研究は減りつつあるのが現状である。グジャラート地方は東西交渉の要衝として、様々な出自の人々が活動した地域であり、ムスリム諸王朝、所謂ヒンドゥー領主層、スーフィー、来航したヨーロッパ人などによって書かれた史料が現存している。このような多様な視点から描かれた史料をもとに、ムスリムの定着と地域社会の変容を再構成することが本研究の目的である。特に、中世における宗教アイデンティティの問題、宗派内および地方毎に見られる統一性・多様性に注意したい。ムスリム、ヒンドゥー、南アジア世界といった既存の分析単位の内実についても批判的検討が必要なのである。留学という機会を生かし、現地の人文・自然環境を実見した上で、時代の変化に留意しつつ史料の記述を批判的に読み解き、ムスリムを包摂した地域社会の歴史像を明らかにする。そして、グジャラート王朝時代の研究を基礎に、共時的・通時的な中世南アジアにおけるイスラームの展開過程を総合的に把握、呈示する予定である。</p>	